

Letter for Members

【コンテンツ】

- 第 121 回学術大会・総会 …………… 337
 - 第 121 回学術大会
 - 平成 24 年度専門医研修会
 - 市民フォーラム
- 第 84 回 APS 学術大会に参加して …………… 341

社団法人日本補綴歯科学会 第 121 回学術大会・総会

メインテーマ

「臨床イノベーションに貢献する補綴歯科—活かせる知識と技術を一—」

● 第 121 回学術大会開催

社団法人日本補綴歯科学会第 121 回学術大会が平成 24 年 5 月 26 日 (土), 27 日 (日) に櫻井 薫教授 (東京歯科大学有床義歯補綴学講座) を大会長として神奈川県横浜市の神奈川県民ホールと隣接する横浜産業貿易センタービルにて開催された。大会テーマは、「臨床イノベーションに貢献する補綴歯科—活かせる知識と技術を一—」であった。

学術大会に先立ち、25 日 (金) にローズホテル横浜にて懇親会が開催された。佐藤 亨実行委員長 (東京歯科大学クラウンブリッジ補綴学講座教授) が司会を務めた。大会長の挨拶に引き続き、古谷野 潔理事長、井出吉信東京歯科大学学長、江藤一洋日本歯科医学会会長よりご挨拶をいただいた。その後、高橋紀樹神奈川県歯科医師会会長のご発声にて乾杯を行った。横浜・中華

街らしく中華料理がふるまわれ、余興として中国雑技団によるパフォーマンスが行われるなど趣向を凝らした懇親会であった。多くの会員、非会員の方々が参加され、大いに懇親、情報交換が行われた。

学術大会初日の第 1 会場は、課題口演で幕を開けた。「補綴歯科における治療効果の評価」、「歯科補綴学に関連するバイオメカニクス・メカノバイオロジー」、「補綴歯科領域のトランスレーショナルリサーチ」の 3 つの課題について選出された各 3 名のファイナリストによる発表と指定質問者との質疑応答が行われ、審査が行われた。シンポジウム 1 「メカニカルストレスに対する生体応答：補綴学的意義と展望」では、魚島勝美先生を座長に、山本照子先生、成瀬恵治先生、加来 賢先生の講演があった。委員会セミナー 1 では、「補綴歯科治療の難易度を計る一症型分類作成のための多施設共同研究



盛況となったイブニングセッション 2 の総合討論の様子
(第 3 会場・神奈川県民ホール大会議室)



ポスター会場にて熱心に討議を行う参加者
(第 4 会場・横浜貿易センタービル)

一」と題し、馬場一美先生を座長に、會田英紀先生、窪木拓男先生の講演があった。委員会セミナー2「歯科補綴領域に求められる大規模臨床研究を考える」では、志賀博先生を座長に、大井孝先生、村田比呂司先生、田上直美先生の講演があった。イブニングセッション1「臨床イノベーションのための若手研究者の挑戦：有床義歯治療と管理の新たな展開」は、夕方18時30分の開始にもかかわらず盛況であり、若手の先生方の熱のこもった口演、質問者との応答が印象的であった。

第2会場は、2日間にわたり臨床に重点が置かれ、国内外で活躍する著明な臨床家によるセッションが行われた。まず「固定性補綴装置の装着時のチェックポイント—日常臨床における咬合検査、適合検査の妥当性検証—」と題した臨床スキルアップセミナーが行われ、田中昌博先生により固定性補綴装置装着時に咬頭嵌合位調整の重要性と調整方法に関して、澤瀬隆先生(座長・演者)によりインプラント上部構造装着時のチェックポイントについての講演があった。続いて、臨床リレーセッション1では、佐藤亨先生、石垣尚一先生の進行で、熊谷真一先生が「力を見極める」、大村祐進先生が「FITを見極める」、石田修先生が「歯冠形態を見極める」と題してそれぞれ講演があり、歯肉退縮と二次カリエスにフォーカスした少数歯補綴の問題点と対応に関して活発な議論が交わされた。午後には、臨床リレーセッション2として、前田芳信先生、武田孝之先生の進行で、宮地建夫先生による30年以上の経過症例を交えた理論展開と、永田省藏先生によるわかりやすい解説により、上減歯列に注目した欠損歯列のリスクに関する深い考察がなされた。

第3会場では、一般講演が行われた後、イブニングセッション2「臨床イノベーションのための若手研究者の挑戦：補綴治療のための検査法の新たな展開」が開催され、若手シンポジストの研究に至る経緯、研究成果に関する講演があり、研究生活を送る大学院生にとって非常に参考となるものであった。夕方の遅い時間での開催にも関わらず多数の参加があり、会場はほぼ満員であった。

第4会場ではポスター展示と企業展示が行われた。広い会場であったが発表者と参加者で埋め尽くす活況であった。

2日目の第1会場では、まずシンポジウム2「咬合咀嚼は健康長寿にどのように貢献しているのか」が、赤川安正先生と矢谷博文先生の進行により行われた。高田豊先生、那須郁夫先生、赤川安正先生、池邊一典先生の講演があり、初日を超える聴講者が来場し、会場はほぼ満席であった。続く委員会セミナー3「ノンクラ



委員会セミナー3にて満席の会場からの質問に答える演者(第2会場・神奈川県民ホール小ホール)



特別講演後のCarlo Marinello先生(中央)と座長の古谷野理事長(左)、櫻井大会長

スデンチャーの現状と問題点—補綴装置の一選択肢となり得るのか—では、大久保力廣先生を座長に谷田部優先生、有田正博先生、大久保力廣先生の講演があった。このセッションには、会場定員を上回る参加者が集まったため、安全上の理由で入場制限をせざるを得ない状況となった。ご入場いただけなかった100名ほどの方には会場外のモニターにてご覧いただかなければならなかった。大会校の不手際により参加者の皆様にご迷惑をおかけしたことをこの場をお借りしてお詫び申し上げたい。午後のシンポジウム3「咬合面形態の機能的意義を考える」でも多くの来場者を集めた。市川哲雄先生の進行で、佐々木啓一先生、加藤均先生、服部佳功先生の講演があった。第1会場では、引き続き表彰式が行われ、課題口演優秀賞、課題口演賞、デンツブライ賞、カボデンタル賞の受賞者が表彰された。

第2会場では、午前中には、臨床リレーセッション3として、細川隆司先生の進行で、武田孝之先生、伴清治先生、木原敏裕先生、桜井保幸先生によりご講演いただき、インプラント上部構造の設計、使用材料等に焦点をあて、現状での到達点と臨床上の問題点を明ら



多くの聴講者が訪れた第2会場（神奈川県民ホール大ホール）

かにするとともに、現時点で考えられる理想的な上部構造に関する議論がなされた。特別講演では、American Prosthodontic Society 会長の Basel 大学教授 Carlo Marinello 先生による「Do we really need so many implants? A prosthodontist's view」と題した講演が行われた。インプラント補綴や審美治療、再生療法による歯牙の保存が脚光を浴びる中で、超高齢化社会を念頭に置いた有床義歯補綴学の有効性に関して、包括的に、わかりやすくご教授いただいた。

本学会大会の最終セッションとして、臨床リレーセッション4が小宮山彌太郎先生、佐藤博信先生の進行で行われた。林 揚春先生、森田耕造先生は、前歯部のインプラント補綴にフォーカスした講演内容で、インプラントのポジショニングと硬軟組織のマネージメントに関して、船登彰芳先生、石川知弘先生は、補綴処置全般において、インプラントおよび天然歯の双方において、補綴装置の予知性および永続性を高めるため、患者の要求に最大限に応え QOL をできる限り向上させるため、また、個々の症例にとって最適な治療を提供するために、保存治療や骨造成術などの補綴前処置を含めたさまざまな治療オプションの保持と適正な選択の必要性に関し



会場内に特設された託児施設の様子。参加者のお子様がお楽しみをお待ちしていた

て、講演と活発な議論が行われた。

今回の学会大会では、会場内に託児施設が無料で設置された。本学会会員の2割を女性が占めていることに対応するものであり、これは本学会学会大会では初の取り組みであった。延べ16名の乳幼児の利用があり、女性会員のみならず男性会員からも感謝の声が寄せられた。

当日は好天にも恵まれ、約2,700名の参加者を迎え、口頭発表73演題、ポスター発表148演題とさまざまな面で過去最大の学会大会として盛会のうちに幕を閉じた。本大会の準備にご尽力いただいた市川哲雄学術委員長、学術委員会の皆様、学会関係各位、ならびに、後援団体各位に厚く御礼申し上げます。また、ご参加いただきました皆様にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。（東歯大・上田貴之）

●平成24年度日本補綴歯科学会専門医研修会報告

平成24年度日本補綴歯科学会専門医研修会は、平成24年5月26日（土）に第121回学会大会に併せて神奈川県民ホール大ホールにて開催された。

今回は、「補綴歯科専門医に必要なCAD/CAMを応用した補綴歯科治療」というタイトルで、2名の演者の講演があった。まず、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科摂食機能保存学分野の三浦宏之教授が、「CAD/CAMを応用した歯科治療の現状と今後の展望」と題して、CAD/CAMを応用した歯科治療の現状と将来の展望、メタルフリー修復を成功に導くための支台歯形

成、印象、咬合調整、合着時の各臨床ステップにおけるポイントについて講演された。次に、福岡市開業の岡村光信先生が、「歯科補綴領域におけるCAD/CAM技術の臨床応用」と題して、進化したセラミック材料の臨床応用とその材料を選択するにあたっての適応症、注意点、問題点ならびに解決策等について講演された。

講演後のディスカッションでは、まず、適合性について議論され、当初に比べて適合はかなり改善され、フリクショナルフィットに近いところまで来たが、メタルボンドと比較するとまだ少しあまいことが確認された。次に強度について議論され、ジルコニアフレームの強度は

問題ないが、レイヤリングする陶材のチッピングを防ぐためにはフレームの設計を正しく行い、陶材の厚みが均一になるようにし、咬合力がかかる部分にはジルコニアのサポートがあるようにすることが大切であり、この考えに則った支台歯形成も重要であり、修復装置の厚みが均一になるように形成をすることと、形成面に角張った部分を残さないようにすることが重要であることが確認された。またブリッジに関して、フルマウスは避けたほうが良いというのが統一見解であった。合着に関しては、接着性のレジンセメントを用いて、歯質と一体化させるのが原則であるが、表面処理剤は使用材料に適した材料を使用する必要がある。特にジルコニアに関しては、リン酸処理を行うとレジンセメントの接着力が落ちてしまうので注意が必要であることが確認された。

専門医更新予定者ならびにこれから専門医を申請しようとする多くの会員が聴講していた。専門医の日常臨床



研修会終了後の三浦宏之先生（左）、岡村光信先生（右）、座長の鱗見進一先生（中央）

において明日から役立つ内容が多く含まれており、非常に有意義な研修会であった。（九歯大・楨原絵理）

●市民フォーラムのご報告

学会の法人化に伴い、公益性のある企画に対する要望が高まっており、このたびの第121回日本補綴歯科学会学術大会に併催の市民フォーラムは、社会連携委員会の企画・運営により、平成24年5月26日に横浜シンポジウムで開催されました。

「義歯を使ってQOLアップーその実際と使用上の注意一」というテーマのもと、新潟大学の野村修一教授による「義歯と健康長寿」と題した講演と、東京医科歯科大学の水口俊介教授による「義歯との上手な付き合い方」と題した講演が行われ、歯の喪失に伴う口腔内の変化と補綴方法の種類、口腔機能の低下が全身に及ぼす影響と健康長寿につながる義歯使用の意義やそのメンテナンスについてのアドバイスが分かりやすく解説されました。講演の後、日本大学松戸歯学部川良美佐雄教授の進行により、参加された市民の方々から、ご自身が受けていらっしゃる治療内容に関することをはじめ、ソフトデンチャーや歯の再生医療の応用の可能性などについて



市民の方から質問を受けられる講師の野村・水口両先生と座長を務められた川良先生

活発な質疑応答がなされ、120名を超える方々にご参加いただいた、大変盛況な市民フォーラムとなりました。（東歯大・関根秀志）



第 84 回 The American Prosthodontic Society 学術大会に参加して

2012年2月23～24日に米国・シカゴで行われた 84th Annual Scientific Meeting of the American Prosthodontic Society (APS) に参加しました。今回は日本補綴歯科学会と APS が学術交流を開始するにあたって、古谷野 潔理事長、小宮山彌太郎副理事長、櫻井 薫財務委員長、前田芳信国際渉外委員長が参加され、APS の役員の先生方と会議をもたれました。私の見たところ、日本人の参加者は、その他に阿部二郎先生と私だけだったように思います。私は Table Clinic で発表させていただきました。

プログラムの詳細は以下のページをご覧ください。

http://www.prostho.org/annual_meeting_upcoming.html

今回の APS の内容は期待以上でした。いずれの講演も、内容が充実しているにもかかわらず、短時間にコンパクトにまとめられており、プレゼンテーション（エンタテイメント？）の方法も勉強になることが多かったです。特に、Albrektsson 先生や Moy 先生の生の口演を聴けたのも貴重な体験ですし、Stohler 先生の、時代の要請（Megatrend）に応じた大所高所からの話も大変

興味深かったです。最終日の Spear 先生のインプラントのアンチテーゼとしての天然歯の補綴の利点は、ある意味 Implant Era への警鐘として、大変面白かったです。

ややもすれば、技術偏重の How to もの、狭い範囲の研究内容、あるいはインプラント中心になりがちな補綴の学会が多いなか、補綴歯科の意義を大きく公平に捉えた講演が多かったと思います。また機会があれば参加したいと思いました。

私としては、補綴学会の重鎮の先生方と一緒にいただいた4日間は得難い貴重な体験でした。世界の補綴の潮流を見て、人脈を築きながら学会の舵取りをされている先生方に、改めて感謝の意を強くしました。

櫻井 薫大会長のもと、5月に横浜で行われる第121回日本補綴歯科学会学術大会には、APSの現会長である Carlo Marinello 先生がご講演されます。ご講演を楽しみにしているとともに、先生が JPS の学術大会にどのような印象をもたれるか少し興味があります。

(大阪大・池邊一典)



Business Meeting Luncheon の会場にて



講演会開始前の朝食会場にて。APSの現会長である Carlo Marinello 先生と前田芳信先生

【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、社団法人日本補綴歯科学会事務局 (jpr-edit01@max.odn.ne.jp) まで、メールにてお寄せください。